
B級彼女とS級彼氏

まる。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B 級彼女とS 級彼氏

【Nコード】

N 3 1 2 5 B A

【作者名】

まる。

【あらすじ】

コンビニには『恋』も売っている？！

よしの あゆむ
芳野歩は、コンビニで働くフリーター。

今時の子にしては珍しい、超現実主義な25歳の女の子である。

ある日、急に休んだ子の代わりに入ったバイト先で、妙な人物が客としてやって来た。

「温めますか？」——コンビニではお決まりのセリフだが、ありえない返事が返ってきて、思わず……、——逆切れした。

『かわいくない』 男女の『かわいい』 コンビニラブストーリー。

一部にR15表現が含まれます。

第1話　逆切れしたのが運のツキ

「このお話は今からさかのぼる事、約20年余り。まだ、携帯電話もポケベルも普及していなかった頃の日本を舞台とした『かわいくない』男女の『かわいい』恋のお話です。」

私は‘運命’なんてもの、絶対信じない。

そんなもの、単に現実から目を背けたい奴が自分に都合良く抱くあさはかな妄想としか思えないのだ。自分で自分の未来を切り開こうとする努力を怠り、ただ毎日なんとなく過ごしているだけで未来に期待するなんて、どう考えてもそんな馬鹿げている。

——私は自分の‘運命’は自分で決める。

だからこそ私は今、ここでこうして……

「いらつしゃいませ」

特別愛想を振り回さなくても良いコンビニで、今日も今日とてピピツとレジを打ち、こうしてなんとか生きながらえている。

と、言うよりも、いつかきつと訪れるであろう‘その日’の為に、今はぐつと我慢の子で様子を伺っている。と、まあそんな所だろうか。

いずれにせよ、今日も‘恐怖の昼休み’がもうじき終わる。

ビジネス街に位置するこの店は、毎度の事ながら12時になると物凄い数の客で店内がひしめき合い、レジに長蛇の列が出来る。そ

の列に並んで居る人からのピリピリと感じるその視線が、余計に私の手の動きを緩慢にさせるとはミリツとも思っていないようだから、これも又困ってしまう。

「ありがとうございました」

それでも今日もなんとか列の最後になる客のレジを済ませ、一息ついた所へ店長の宮川さんが声を掛けてきた。

「芳野さん、悪いね。急に来れなくなった昼に入ってる子の代わりに入ってもらっちゃって。芳野さん、いつも夜のシフトだから、眠いんじゃない？」

「あ、いえ。大丈夫です。困った時はお互い様ですから」

「そう？ そんな事言っちゃうと又お願いしちゃうかもしれないよ？」

「ええ、いいですよ。今は結構融通きくんで」

正直に言つと、今も、の間違い。ただ、なんとなくいつも暇な人間だと思われたくないが為に、ちよつといい様に言っただけ。

「え？ 本当？ じゃあ昼のアルバイトさんが急にお休みになった時は、またお願いしようかな？」

「はい、遠慮なく言って下さい」

店長は長年勤めていた鉄鋼関係の会社を脱サラし、奥さんと27歳になる息子さんと3人の家族経営でこのコンビニを始めた。店長も奥さんも元々が常に微笑んで居るような顔つきで、物腰もとても柔らかな人達である。勿論、息子にもその遺伝子は受け継がれていて、

「何言ってるんだよ、父さん。そんな事言ったら歩あゆむちゃんに迷惑

が掛かるだろ？」

と、バックルームから現れた息子の慎吾さんも、穏やかな顔をして店長を窺^{たしな}めた。

このコンビニには宮川さんが3人居るので、オーナーである宮川さんは‘店長’、奥さんは‘宮川さん’、息子さんは‘慎吾さん’と呼ぶのがいつの間にか定着している。

「そもそも、こういう時こそ身内を使わないでどうすんの？ 何の為の家族経営なんだか」

「いや」だって、みっちゃん今日は社交ダンスのレッスンがある日だからって」

‘みっちゃん’事、宮川美津子さん。つまりは店長の奥さんだ。しかし、『社交ダンスのレッスンがあるから出られない』ってなにと優雅な理由を今初めて聞かされて、ちょっと口元がヒクついた。

いつもの私だったら、“宮川さんらしいな”って思うだけで何とも思わないんだけど、急な出勤命令で睡眠時間がたったの2時間しかなかったもんだから、いくら温厚な私でも流石にこればかりは……

「あ、や、慎吾さん、私、本当に大丈夫なんで」

とまあ、結局本当の事なんて言えない。だって、店長ってばマジで悪気無さそうだし、奥さんの事ラブだし。それに、

「いや、親父の言った事は気にしなくていいからね」

こうやっていつも慎吾さんが庇ってくれるってだけで、もやっと

した気分も晴れるのだ。

奥二重の目を更に細めながら慎吾さんはニツコリと微笑んだ。

“癒されるなあ”

決してイケメンでは無いけれども、2歳年上の慎吾さんは癒し効果を併せ持つやさしいお兄ちゃん的存在。一人っ子の私は、バイト先で慎吾さんに会えるのが唯一の楽しみだと言っても過言は無いくらいだ。

私がぼろっつとしている隙に、慎吾さんは店内をぐるっと見渡していた。そして、弁当コーナーに男性客が一人居るだけ、という現在の店の状況に、

「步ちゃん、あのお客さんが出たら休憩行こうか。　それまで僕は裏で父さんと検品してるから、出たら声掛けてくれる？」

「あ、はい。　判りました」

『じゃあ、よろしく』そう言うと、ニツコリと二人は微笑みながら扉の向こうへと姿を消した。

しばらくして、先程の弁当コーナーに居た男性客がレジに近づいてくる気配を察した。どうやらレジ横に置いてある商品が気になったのか、そこで足を止めてじっと眺めている。

「……、いらつしゃいませ」

しばらくして、その男性客は視線をレジ横のガラスケースに向けながら、レジへとやって来た。

「これも」

「はい、から揚げちゃん、ですね」

その男性客が指をつんつんと指し示し、私は背中を反らして何を指して居るのかを確認した。男性が指し示したものが人気商品のから揚げちゃんだと判ると、ガラスケースからそれを取り出し、テーブルで蓋をする。

そして、もう一度レジへと戻り、台の上に置かれているその人が持ってきた弁当を見て、思わず心の中で失笑してしまった。

“ から揚げ弁当——って、この人どんだけから揚げ好きなんだろう”

「お弁当温めますか？」

いつも通りのお決まりのセリフ。

この言葉に対して返って来るのは、『はい』か『いいえ』の二つだけだと思っていた。でも、世の中色んな人が居るもので、

「冷たくしといて」

「……え？」

その言葉の意味にピンと来なかった私は、いつもは客の顔など見る事も無いのに、思わず顔を上げその人の顔をまじまじと見てしまった。

肩までかかる黒髪と浅黒い肌に彫りの深い端正な顔立ち。全身黒ずくめのスーツを着た、‘いかにも’な感じの強面なその人の眉間が、みるみる皺を刻み始めるのが判る。

「——だからっ、『冷たくしといて』って」

「はあ?!」

今思うと、仮にもお客さんに対してあんな態度をとってしまった私も悪いのだけれども、目の前で明らかに自分に向けてイラつきを見せた相手に対して、昨夜の睡眠不足がたたったのか、自分はキレられる筋合いは無いと逆切れを起こしてしまい、更に相手を激高させることになってしまった。

「あの、意味わかんないんですけど?! 温めるんですか? 温めないんですか?」

「っ?! だからっ! 冷たくしとけばいいっていつてんだろ?!」

「……それって、このままでいいって事ですか?!」
「そうだよっ!!」

“それならそうと言えないのかね?!”

休憩前に変な客に当たったたと、ムスツとしながらレジを打つ。何となく、胸元のネームプレートに視線を注がれて居るような気はしたけど、そんな事は気にしない。だって本当に意味が判らなかつたんだもの。

“文句があるなら、遠慮なくどうぞ”

内心そんな風に思いながら、レジ袋に弁当を詰めていたが、待っていたのは文句といった類では無かった。

「お前、……芳野か?」
「へ?」

さっきの威勢は何処へやら。改めて名前を問われて又顔を上げた。

“ あんた、今ネームプレート見てたよね？ ” と思いながらも少し見つめ合う事、約5秒。

浅黒い肌を白くして、肩まで掛かる髪を短くして……。 と、頭の中で色々と着せ替えてみると、一人だけ嫌な奴の顔に当てはまる事に気付く。

“ ……、——！！ こっ、こいつ、もしや、——小田桐い？！ ”

後の人格形成に多大な影響を与え兼ねない‘高校生’という多感な時期に、何の因果かこやつと出会ってしまったせいで、もう手の施しようが無い所まで私の人格はひん曲がってしまったという、いわゆる諸悪の根源！

もう二度と会うまいと思っていた男に、偶然とはいえ、こんな所で再会してしまったのであった。

第1話〜逆切れしたのが運のツキ〜（後書き）

「今日のなつかしす。」

・【コンビニ】

1970年代に日本初のコンビニができ、1990年頃には乱立激戦状態となる。

こんにちは、まる。と申します。

この度は、こんな拙小説に目を留めてくださり、誠に有難う御座います。

私にとってこの作品は初めての事だらけですので、

色々と目につく所もあるかと思いますが、

何卒、生暖かい目で見守って頂ければと思っております。

とりあえず、明日も更新する予定ですが、

明日以降の更新は、一応「週1」を目指しております。

なので、又来週にでもものぞきに來て頂ければ幸いです。

それでは今後とも『B級彼女とS級彼氏』を宜しくお願い致します。

第2話　そうか、これが厄日というものか

目の前にぬつと立ちはだかって居る嫌な客が、私の名前を確認するかのようには呼んだ。すぐには気付かなかったけれども、5秒間じっと相手を見ていたら、随分昔に記憶から抹消していた人物が浮びあがってきた。

「……、」

「やっぱり……お前、丁高に居た芳野だろ?!」

「ち、ち、ち、ち、違います!!」

私は咄嗟に嘘を吐いた。

もう二度とこいつとは絡みたくない、思い出すのも嫌気が差す。

「はあ??! お前この期に及んで嘘とか、——ありえん!」

「ひ、ひひひ人違いです!」

レジからつり銭を取る手が小刻みに震え、落ち着け、落ち着かなきゃと思えば思うほど、上手く小銭を取ることが出来ない。

こんな時に限って万札出すとか、……もう勘弁してください。

「人違いって、……ネームプレートに『芳野』ってちゃんと書いてあるだろーが? ああ?!!」

“ぐつ、相変わらず口悪いな、こいつ……”

「違いますっ! 『芳野』って書いて『やまだ』って読むんですよ!」

苦し紛れから出た嘘だが、漢字にはとんと弱い奴の事だ。納得するに違いない、うん。だって、小田桐はアメリカ人と日本人とのハーフで、高校生時代も国語はまあひどい点数だったのを克明に覚えている。だから、私は小田桐の過去の実績からして、こんなありえない嘘でも簡単に引つ掛かるだろうと、自信を持って言ったのだ。

なのに……、

「お前な……俺がそんな見え透いた嘘に『はい、そうですか』なんて言うと思ってるのか？」

「言っじゃん！ あんた昔、『田中と書いて、いしばし』です』っての信じてた……」

とまあ、つい、覚えて居る事をベラベラと調子に乗って言ったら、小田桐の口元がニヤリっといやらしく上がって思わず口を噤んだ。

そんな小田桐の表情を見て、そこでやっと自分の失言に気付く。

“はうっ！ しまった！”

「へえ。昔——、ね」

「はっ！ い、いや、昔そんな番組ありましたよね、なんて。ははは……」

まだつり銭も返していないと言うのにから揚げちゃんの封を開け、腰を台にもたげながらそれを一つ口に入れている。無言のままじろりと横目で見られて、変な汗が吹き出るのを感じながら、やっこの事でつり銭を渡すことが出来た。

「あ、ありがとうございます！」

「……。」

“さ、さあ帰れ！　これであんたとはオサラバだ！！”

そう心の中で言ってみても、当の小田桐は帰るところかドンと腰を落ち着かせてしまつて動こうともしない。面倒ごとに首を突っ込みたくない私は、こんな奴はほつといてさつさと休憩に行かせて貰おうと、その場を離れバツクルームへの扉を開けようとした。

と、その時。まだ手も触れてもないその扉が急に開け放たれ、中から慎吾さんが勢い良く飛び出してきた。

「歩ちゃん、もうお客さん出たよね？　休憩行つておい……あ、失礼しました」

私がバツクルームへ向かつてくるのが小窓から見え、きっと誰も居ないと思つて大きな声でそう言ったのだらう。店内に出てみるとまだ居る小田桐の姿を見つけて慎吾さんは頭を下げた。

“いい、いいっ！　　慎吾さん、こんな奴に頭下げなくてもいいっ
てば！”

思つて居る事が慎吾さんに当然伝わる事は無く、ただくしゃくしゃにした私の顔を見て慎吾さんは首を捻っている。

「あ、……じゃあ、行つてきます。　えと、（……あちらの方は、お会計済みですのぞ）」

「あ、うん。　りょーかい。　行つてらっしゃい」

後半部分を小声で言つと、慎吾さんはいつも通りに笑顔で返してくれた。

やっとの事で解放されるのだとほつと息を吐きながら、バックル
ームに通じる扉に向かって伸ばした手は、どうしてだか目の前にあ
る扉に触れることすら出来なかった。

「……、——っ?!」

襟の後ろをむんずと掴まれた様な感触に驚いて、咄嗟に後ろを振
り返ってみた。

すると、そこには何故か般若の様な恐ろしい顔をした小田桐が、
何か文句を言いたそうにして私を見下ろしているではないか。

「はあっ?! ちょ、何す……」

「丁度いい。休憩するんだったら、ちょっと来い。話がある」

「な、何言って……ぐあっ!!」

「問答無用」

遠慮無しに襟首を掴んだまま、引き摺るようにしてずんずんと出
口に向かって歩き出す。

私は、目を丸くしている慎吾さんに両手を伸ばして助けを求める
も、突然の事に慎吾さんはどう対応していいやら判らない様な顔を
していた。

出口を出た所で、襟首を開放される。後ろ向きと言つか、蟹歩き
と言つか、とにかく凄い体勢で歩いていたけど、すっ転ばなかった
のがある意味奇跡だと思う。

首元を押さえて、ぜーはぜーはーと深呼吸をしている私の頭の上
から、ヒヤリと冷たい声が降りてきた。

「お前、どういっつもりだ?」

「……は、……はあ？ そっちこそ、一体何様のつもりよ?!」

私は呼吸を整えて上体を起こした。

身長170cmと、女にしては背は高い方の私だが、そんな私でも優に見上げる事が出来る、相変わらず背がでかくてヒョロい小田桐。ただでさえ、この傲慢な態度が気に入らないって言うのに、更に輪を掛けて上から見下ろされるのだからたまらない。

“ばかばかしい、相手してらんないわ”

「……？ 何処へ行く？」

「何処つて、休憩よ！ あんたさっき聞いてたでしょ?!」

こいつと話す事など全く無い私は、踵を返して店の裏口へと歩き出した。

「――？ 何でついてくんのよ？」

「へえ。 こんなトコに裏口があったんだ」

「もう、いいからさっさとそのから揚げ弁当持って帰んなってば！」

私がそう言うと、小田桐は思い出したかのように、手にした袋から揚げちゃんをひとつ取り出し、又パクリと口の中に放り込んでいる。

“ ったく！ ……?! ”

裏口のドアノブに手を掛けた時、バンツ！と小田桐の長い腕が顔の横から現れた。

勢い良く振り返ってギロリと小田桐を睨み付けると、あいつは何故かフツと嬉しそうな顔をする。

“はあっ?! この状況で笑うとか! — ははん、そうか。
小田桐はマゾなのか”

心の中で何故か勝ち誇った私は、片口を上げながら更に目をキツと細めてやった。

すると、扉を押さえつけていた小田桐の腕が離され、手元のから揚げちゃんに又伸びる。そして、何だか呆れたかのような顔つきになり、とんでもない言葉を私に浴びせた。

「お前さ、……あいつかわらず、かわいくねーのな」
「?!?!」

“はあ? はあ? はあっ?! こ、こいつ、未だにこんな事、私に言うのか?! ”

腑抜けたツラして、から揚げちゃんをモリモリと食べている小田桐に、

“お前みたいな奴は、から揚げちゃんが喉に詰まって死ね! 若しくは、から揚げちゃんの食べ過ぎで、超肥満になってトイレから出られなくなつて死ね!! ”

と、心の中で何度も呪いをかけた。

「あ、相変わらずって、私は今初めて会ったばかりなんですけど! 」

「お前、……まだその話有効だと思つてんの? 」

『馬鹿じゃね? 』ボソツと聞こえるか聞こえないかくらいに呟いて、

から揚げちゃんを又口にくわえている。

はらわたが煮えくりかえるとはこの事かと自覚した。これほどまでに、いつその手で殺めてやりたいと思った事は無い。

身体全体からふるふると怒りによる震えを感じながらも、もうこうなったら、最後までシラを切り通そう、そうすればもうこいつと絡む事は無いのだ」と、必死で自分に言い聞かせた。

「あの、もういいですか?! 休憩時間終わっちゃうんで!」

小田桐はから揚げちゃんを口にくわえたまま、から揚げちゃんが入っていた袋を引っくり返したりしている。もう食べ尽くしてしまった事にどうやら気付いたのか、その袋を私の手の平にポンツと乗せた。そして、又小田桐の腕が顔の横にドンツと置かれて、あっさりと囲まれてしまう。

「な、に……」

もう一方の手でから揚げちゃんを口から離し、ニヤリと不敵な笑みを浮かべている。

「お前さ、気付いてるか?」

「はあ?! 何が?」

「さっきお前が言ってた、『田中と書いて、いしばし』って読むってアレ。確か、去年か一昨年流行ったギャグだぞ?」

「は?! それが、どうし……、——ふがつ!!」

大きく開けた私の口が、から揚げちゃんでポスツと塞がれた。そして、小田桐はその大きなブラウンの瞳で私を射抜いたまま、自分の人差し指と親指をちゅっ、ちゅっとうつくり順に舐めていく。

私は職場である裏口の扉に貼り付けられ、口はから揚げちゃん
で塞がれて、手にはから揚げちゃんの袋を持たされたまま、から揚げ
ちゃんのエキスが染み付いた指までをも、最後まで味わい尽くそう
としている男の前で硬直していた。

“ 去年か、一昨年流行った?? え?”

「……っ!!」

「やっと、気付いたか? 一体、誰と間違えたのか知らんが、お前、
相変わらず嘘も下手なのな」

そう言つて、頭をポンポンツと撫でるとズボンに両手を突っ込み
ながら、小田桐は背中を向けて去つていった。

私は口にくわえさせられたから揚げちゃんを取り、肩をがつくり
と落とす。

「……し、しまった……、墓穴掘った」

完全に別人になりすましたと思つていたから、ショックはかなり
大きい。

“ 流石の小田桐でも‘やまだ’は読めたのかな。せめて‘やまの’
つて言つべきだったのかも”

「――。 って、…… あんた、手! 今、舐めた手で私の頭触った
でしょ?!」

大声で張り叫ぶ私に余裕を見せ付けるかのようにして、小田桐は
振り返りもせず手を振っている。

“や、厄日だ……！”

きいいい！っと言わんばかりに、手にしたから揚げちゃんをポイツと口の中に放り込んだ。もぐもぐ、とおいしく味わって飲み込んでから、ハタ。とある事に気付く。

「——ああっ！！　これ、さっき小田桐がくわえてた！……」

もういつその事、自分がこの世から消えて無くなりたいとさえ思ってしまった。

第2話　そうか、これが厄日というものか（後書き）

「今日のなつかしす。」

・【田中と書いて、いしばし、と読む】

1989年頃に放送していた、「とんねるずのみなさんのおかげです」のおかげです高校内のコント。

第3話　恋する乙女は盲目ナリ

「あら？　芳野さん。今日は昼勤なの？」

「ええ、そうなんですよ、望月さん」

正確に言つと、‘今日も’だけどね。つて、昨日も確かこんなやりとりが脳内で行われた様な気がする。

私は今日も昼勤である。確か昨日も代理で昼勤務をして、一旦家に帰って少しだけ休んで又夜勤をしたはず。

もう流石に疲れ果て、まさに泥のように眠っていたら、悪夢の再来か、又2時間程寝たところで、けたたましく電話が鳴り響いた。

巷では、最近の電話と言ふものは、‘留守番電話’と言ふ機能が当たり前のようについていて、しかもなにやら‘ファックス’と言う大そう優れた機能がっているものもあるらしい。

道端で中学生が意味を判つて言っているのかどうかは判らないが、クイズ形式で‘ファックス’と言う言葉の文字を一字入れ替え、それを女の子に言わせてみては、ニヤニヤと嬉しそうにしている光景を何度か見た事がある。

そんな、お留守番も、いやらしい妄想すらも出来ない我が家の電話は、鳴ったが最後。受話器を取るか、放置するか、線を抜いてしまふかしが選択肢が残されていないのだ。

誰からの電話なのか取らなくても判る私は、店長の困った顔がチラついてオチオチ眠る事も出来やしない。

なので、今朝も爽やかな朝日と共に、このコンビ二にやって来ました。

ただでさえ、極度の睡眠不足のせいで目がしょぼしょぼしている

と言うのに、朝日と望月さんの眩しさのダブルパンチをもろに受け、まさにダウン寸前である。

「ねえ、芳野さん。もし良かったら、私も慎吾さんみたいに、歩ちゃん、って呼んでもいいかしら？」

「え？ ええ、全然いいですよ」

「わあ、本当？ じゃあ、芳野さん……、じゃなかった、あゆむちゃんも、輝ちゃん、って呼んでね」
「はあ」

望月輝子さん、28歳。通称、‘望月さん’は只今から、輝ちゃん、に名称変更致しました。

そんな輝ちゃんは、会社を経営している父を持つ、生まれながらのお嬢様である。

通常昼勤務のバイトさんなのでめったに会わないのだけでも、そもそもバイトをしている事が不思議だと常々思ってきた。当の本人も、あまり働くという事に意欲が湧かないのか、昨日の様に突然休んだりするから他のバイトや宮川家にしわ寄せが来たりする。

このバイト自体も、輝ちゃんのお母さんが花嫁修業的にやらせているものらしいが、コンビニのアルバイトで一体輝ちゃんに何を学ばせたいのかは不明だ。

輝ちゃんはいつも、女の子らしいふわふわとしたワンピースとロ―ヒールのパンプス。綺麗で艶のあるストレートの髪を、頭頂部で一つにまとめテールを揺らしている。

自分よりも年上とは到底思えないほど愛らしい女の人なのだが、その可憐な出で立ちの上に、青と白の縞々模様の制服を着て居るのだから、色んな意味で眩しい人なのだ。

そして、もう一つ。実は、輝ちゃんは慎吾さん狙いらしい。

「ねね、昨日のお昼って慎吾さんだったんでしょ？ シフト読み間違えちゃった。休むんじゃないかと思ったな」

そう言っ、て、ころころと輝ちゃんは笑った。

この店のシフト表には基本、アルバイトのみが組まれていて、宮川さん一家は特に名前が表記されていない。まずはアルバイトの希望を聞いて、足りないところを一家で補う。と言う感じにしている。そして、この輝ちゃんは日ごろのシフトを読み、慎吾さんが出る日と出ない日を大体把握出来ると言うのだから、愛の力は計り知れないのだなと思わず感心してしまった。

て、言うか、今はそんな所に感心するより、あんたのせいで私がこんな連勤地獄を味わってるんだよ！」っと、一応良識ある大人として一言いつてやるべきじゃないかと思う。

「私、昨日も夜勤明けの昼勤だったんですよ。ま、今日もそうなるんですが」

若干、遠まわし気味でそんな風に言ってみたけれども、次に返って来た彼女からの返答に、わずかながらも気を遣っていた自分を恥じた。

「えゝ？ そうなの？ 歩ちゃん、そんなにお金に困ってるんだ……」

って、何故にそうなる？！

しかも、私の両手を掬い上げ、輝ちゃん特有の慈愛に満ち溢れた濡れた瞳で、私の事をじつと見上げてくるではないか。

“もう、イヤ、この人……”

決して悪意があつてこのような事を言っているわけではないと判っているからこそ、結局何も言えなくなってしまう。

「や、あの」

「それはそうと！」

「ええ？」

パツと手を離されて話を切り替えられた。この変わり身の速さは見習いたいものである。

「昨日暇だったから、お家でビデオ鑑賞してたんだけど、歩ちゃん、トミー・クルーズ」ってアメリカの俳優さん、知ってる？」

“ ひ、暇だったのか…… ”

「ああ、はい。‘ コックス・テール ’ に出てる人ですよ。あの、やたらお酒の入った瓶を振り回している……」

「そうなの！ あの俳優さん、慎吾さんに凄く似てるわよね」

両手で頬を覆い、トミーさんを思い浮かべて居るのか慎吾さんを思い浮かべて居るのかは判らないけれども、とにかく自分の世界に入り込んでしまったようだ。

私は慎吾さんのどがトミー・クルーズに似ているのかすら判らず、話をあわせられずにいた。

“ 似てるって、どこだろう？ カクテルを巧みに作り上げる所と、絶妙なタイミングでから揚げちゃんを揚げる所……か？ ”

あれほど私のお兄ちゃん的存在だった慎吾さんだったが、昨日の一件で実は少し失望している。

思い出すのも腹が立つ。私の大ッ嫌いな小田桐に首根っこを掴まれ店から引き摺り出された時、私は両手を伸ばして慎吾さんに助けを求めたというのに、当の慎吾さんはただじっと見送っているだけだった。

小田桐が去った後、店の裏口から中へ入ると、店長と店番を交代した慎吾さんが血相変えて飛んできて、

『歩ちゃん！ さっきのあれって一体……』

『いや、ただの通りすがりです』

『ええっ？ そんなわけ……』

『あるんです。 さっきのは綺麗サッパリ忘れてください。 以上

！』

『あ、はい』

と、もう小田桐の事は忘れたかったのに、何故か慎吾さんはその後もずっと小田桐の話をしてきた。

結局の所、慎吾さんはあの時突然の事で驚いたには驚いたけど、小田桐から滲み出る‘いかに’な威圧感に、向かっていく勇氣がもてなかったらしい。

『ごめんね、本当にごめん！』

何度も頭を下げて、私に謝ってくれた。

まあ、その事をいつまでも根に持つわけじゃないけれども、いざと言う時に慎吾さんは恋人を守る事が出来るのかいささか不安ではある。

それとも、私が慎吾さんの恋人だったとしたら、身を挺してまでかばって貰えたのだろうか？

“ いや、でも……うん ”

「……ちゃん、……あゆむちゃん？」

「え？ ああ、はい、何ですか？」

つい、輝ちゃんと一緒に私もトリップしてしまっていた。

「慎吾さんの奥二重の目とか、笑ったら目尻が下がる所がトミーと似てない？」

「は？ 似てるって顔がつて事ですか？！」

若干、笑いを含めながらそう言っていると、流石の輝ちゃんも、

「『顔が』じゃなくてね、『奥二重』なところと、『笑ったら目尻が下がる』って言う所」

顔の一部分が似ていると言う以前に、『様式』が似ている……とでも言いたいのだろうか。A4のコピー用紙と、同じくA4サイズのダンボール紙を並べて、『A4な所がそっくり』って事？ そんな事言ったら、慎吾さんに似た人なんてごまんと居るだろうな。

そもそも、トミーさんの目って奥二重なのかも疑問。

「それって、流石に慎吾さんに失礼過ぎやしませんかね……しかも、仮にも輝ちゃんの好きな人だと言うのに」

って言ったら、『やだあ！ もう！』って、本気で照れた輝ちゃんに背中を思いっきり叩かれてしまった。この人は、手加減と言うものを知らないのだろうか。

「イタタ……、——あ、そうだ、‘恐怖の昼休み’の前に在庫補充行ってきます」

「あ、はい、宜しく」

輝ちゃんの慎吾さんネタが過熱する前に、上手く理由をつけてバツクルームへと入って行った。

「ん？ もうミネラル無くなってるな。取ってこよ」

とうとう、水にお金を出してまで買う時代になったのか、と、ひとりごちてミネラルウォーターのダンボールを、店の裏側にある冷蔵庫の前にドスツと降ろす。

ダンボールを開け、中からミネラルウォーターのペットボトルを3本取り出した。

「この冷蔵庫も上手く考えてるよね、店内で補充すると先出しとかめんどいし、客の邪魔になったりするもんね。その点、コンビニの冷蔵庫は裏側から補充出来るから楽チン」

冷蔵庫の扉を開け、ペットボトルを置こうとしたその時、

「‘俺’の水がないぞ」

「——うわっ！！」

あろう事か、冷蔵庫を挟んで店内側から、小田桐が私をじっと見つめていた。

第3話〈恋する乙女は盲目ナリ〉（後書き）

「今日のなつかしす。」

・【電話機】

1985年、留守番電話機能を搭載した電話機が発売され、1990年代にはFAX機能もついたものも使われる様になる。

・【トム・クルーズ】

アメリカのイケメン俳優。代表作の一つでもある「カクテル」は1989年に日本で公開された。これを真似、ボトルをパンパン割って怒られるバーテンさん多発。

この映画がきっかけで、「セックス・オン・ザ・ビーチ」と言うカクテルが流行り、ニヤニヤしながらオーダーするおっさんが多数出没するという、怪奇現象が起きた。

・【ミネラル・ウォーター】

1983年、一般家庭向けに「カレーを食べる時に一緒に飲む水」として、『六甲のおいしい水』が発売される。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3125ba/>

B級彼女とS級彼氏

2012年1月12日23時55分発行